

令和六年度

国

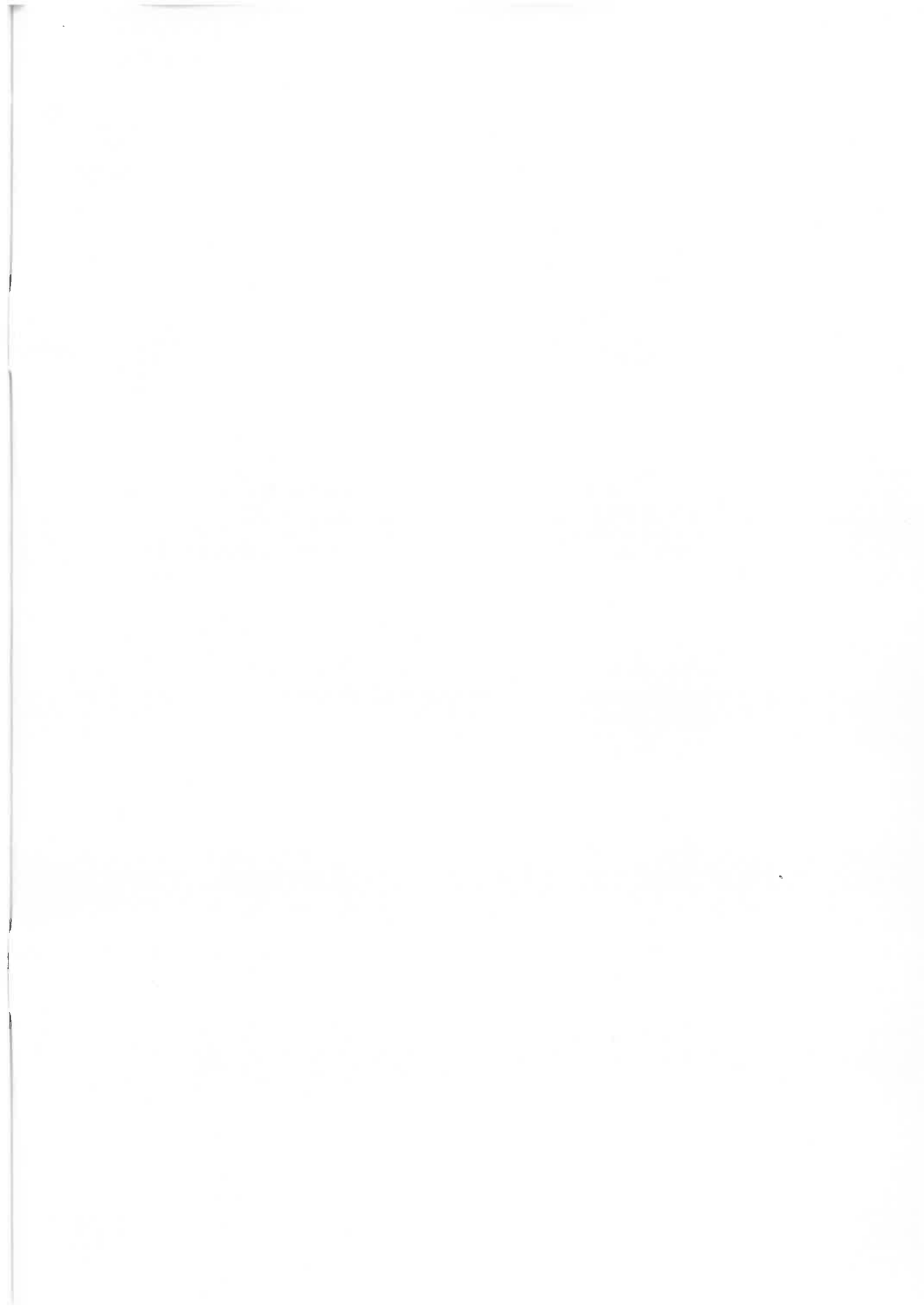
語

(60分 120点)

注 意

- 一 試験開始のチャイムが鳴るまで、表紙を開いてはいけません。
- 二 試験開始のチャイムが鳴ったら、まず解答用紙の決められた所に受験番号を書き、問題のページ数をたしかめてから始めなさい。
- 三 問題は二十四ページまであります。ページの不足や乱れがあったら、だまって手をあげなさい。
- 四 印刷のはっきりしていない所があったら、だまって手をあげなさい。
- 五 試験終了のチャイムが鳴ったら、すぐ鉛筆を置き、解答用紙を、表を上にして問題用紙の上に置きなさい。

受 験 番 号



(問題は次のページから始まります。)

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

中学一年生の轟虎之助は、ケーキ作りを趣味にしている。昨年卒業した兄の龍一郎は、在校時サッカー部のキャプテンで学校の有名人だったが、虎之助は兄とちがって背が低く、顔立ちが女子っぽい。ある日の放課後、剣道部に所属している一学年上の黒野に呼び止められ、生徒会室に連れて行かれる。

三階の廊下に出て、先輩といっしょに角を曲がる。手洗いの流しを通りすぎ、パソコン室のとなり、生徒会室の扉を、黒野先輩はノックした。

生徒会室？

「連れてきましたー」

「入って」

凛とした声。黒野先輩はドアを開け、ぼくを見た。

「どうぞ、お先に」

ためらいながらも、おすおすと中に入るべく。

「轟虎之助くん」

アルトの声（低めの女性の声）で、その人が女子だとわかった。

背が高い。薄暗い部屋に窓からのギャッコウで、顔はよく見えない。だれだろう。

「電気くらい、つけとけよ」

そう言つて、黒野先輩が蛍光灯のスイッチを押した。部屋にいた女子の顔が照らされる。

短くした髪に、きりつとした眉。涼し気な一重のまぶた。するどい瞳。きゅつと結んだ口元。スカートではなくスラックス

（ズボ）をはいていて、それがひどく似あっている。

ぼくは、その人がだれかに気づいて、ぎよつとした。

「祇園寺先輩……」

先輩はイガイそうに眉をあげた。「私のこと、知ってるんだ？」

「いや……まあ」

生徒会長の名前くらい、さすがに知っている。

祇園寺羽紗。

新船中学校生徒会長兼剣道部副部長。有名人だ。ボーイッシュな（少年の）

雰囲気と整ったヨウシから、学校中の女子たちのあこ

がれの的となっているカリスマ。通称「ウサギ王子」……。

そんな人が、ぼくなんかになんの用だろう？

「ウサギ王子よ、轟虎之助はたいそういそがしいらしい」

黒野先輩がそう言つて、パイプ椅子に腰かける。

「さつさと用事をすませて、カイホウしてやりましょう」

祇園寺先輩はうなずいた。「ああ、そうだね……うん、わかつてる」

そう言つて、視線を落とす。足元をじつと見つめ、先輩はだまりこんでいる。

沈黙が苦しくなつて、ぼくはたずねた。

「あの……ぼく、なにかしましたか？」

「いや、そうじゃない。ちよつと、頼みたいことがあつて」

祇園寺先輩は首を横にふつてそう言つと、ぼくをまっすぐに見た。

「これから言うことは、⁵タゴン無用。私たちだけの秘密にしてほしい」

その目力というか、^{きほく}気迫のようなものに、ぼくは何度もうなずく。

「あと、こうやって私たちが会っていることも、もちろんだれにも言わないで」

「わ、わかりました」

ぼくの返事に、祇園寺先輩はちいさく息をついた。

それから、きゅつとくちびるをひき結んで、また視線を落とす。

再び沈黙。

しびれを切らしたように、^①黒野先輩がため息をついた。

「……轟虎之助。祇園寺先輩はさ、おまえさんに頼みがあるんだと」

祇園寺先輩が⁶サッキのこもった目でそちをにらむ。関係ないぼくまで思わずすみあがってしまうほどの迫力。しかし、涼しい顔で、黒野先輩は続けた。

「タルトタタン（^{リングを用いたケーキ}）の作り方を、教えてほしいそうだ」

「え……？」

タルトタタンの作り方を教える？　ぼくが？

祇園寺先輩の顔を見ると、それこそ、リングのようにまっ赤になっている。

「作れるんだろ？　タルトタタン。このまえそう言ってたよな。教えてやってくれ」

黒野先輩が言う。ぼくはたずねた。

「な、なんで、ぼくなんですか？」

祇園寺先輩は言った。

「知りあいには頼めないから。きみと私に⁷セッテンはない……今までは。これからは^{かく}隠しとおせばいいし。だから、表面上、私た

ちは知らない者同士ということにしてほしいの」

どうして、そこまで秘密にしたいんだろう。

その疑問が顔に出ていたのかもしれない。祇園寺先輩は、自嘲的に笑って言った。

「私なんか、ケーキを焼いていたら、へんでしょ」

「どうしてですか？」

べつに、いいんじゃない。だれがケーキ焼いても。

それに、祇園寺先輩は……女子じゃないか。

ボーイッシュとか、「ウサギ王子」とか、言われているけれど、女子にはかわりない。

タルトタンくらい、作っても、なにもおかしくないでしょ？

もちろん、そんなのは性差別だ。わかってる。男子だろうが女子だろうが、ケーキを焼きたければ焼けばいい。あまいものが食

べたいなら食べればいい。

それをなんだかんと言っているのなら、そっちのほうがおかしい。

よけいなお世話、というやつだ——そのことは、ぼくがいちばんよく知っている。

だけど、それでも……。

女子なら、ケーキを焼いても、どうこう言われたり、しないでしょ？

②「スイーツ男子」より「お菓子作りが好きな女子」のほうが、ずっと理解されやすい。

そんなふうに言おうかとも思ったけど、言えなかった。

先輩がひどく思いつめた顔をしていたから。

「……とりあえず、ライン（メッセージを送るためのソフト）のID（連絡先を示す文字列）を交換しとこうか」

黒野先輩が言って、ポケットからスマホを取り出した。

会計を終え、ぼくは黒野先輩についてスパーを出た。学校の近くだし、どうしても人の目が気になってしまう。きよろきよろしてしまう。

「だいじょうぶ。だれにも会わない」

「いいや、会わない。おれといっしょにいれば、めんどろなことは起こらない。だから安心していい。楽しく行こうぜ」

ぼくはそれからもびくびくしていたけれど、けつきよく祇園寺先輩の家に着くまで、だれにも会わずにすんだ。黒野先輩はインターフォンを押すと、低い声で言った。

「なんだろうね、この人。」

平然とこたえる祇園寺先輩の声。

「おい、あいつノーマリアクションだよ」

しばらくして、ドアが開いた。顔を出した祇園寺先輩はＴシャツにハーフパンツをはいている。ラフな格好だ。ぼくが会釈す
えしゃく
ると、先輩はちいさくうなずいた。

「よく来た。入って」

「おじゃまします」

黒野先輩がそう言って、玄関でスニーカーをぬぎ、そそくさと家にあがる。ぼくもそれに続いた。

「王子、親御さんは？」

「王子って言うな。ふたりとも出かけた」

「ほうほう。タルトタタン焼き放題ですね。轟虎之助、洗面所こつちだぜ」

黒野先輩は何度も来ているのだろうか。なれている感じがする。

念入りに手を洗って、それからキッチンに通された。

よそのお宅のキッチンって、なんだか緊張する。ガスコンロじゃなくてIH（電子コンロ）だ。「じゃ、さっそくはじめようぜ、シェフ」

黒野先輩が言った。どこから出してきたのか、漫画を読んでいる。

「シェフじゃないだろ」

あきれたように祇園寺先輩が肩をすくめる。「こういう場合は、パティシエ（お菓子職人）だ」
.....
そういうこと？

ぼくはカバンからレシピを印刷した紙と、ケーキの型を取りだす。

「えっと、祇園寺先輩」

ぼくは言った。

「基本的には、レシピどおりに作るだけです。だから、教えられることはとくにないです。レシピも、ネットで適当にヒロ⁸ってき
たやつだし」

先輩はうなずいた。

「はずかしながら、レシピどおりに作るってこと自体が、すでに私にはむずかしいんだ」
真剣な顔だった。ぼくはなんて答えればいいのかわからなかった。

「……じゃあ、はじめましょうか」

まず、リンゴを四つ切りにして、皮をむき、芯を取る。鍋にバターと砂糖を入れて、リンゴがしんなりしてくるまで炒める。水が出てきたら弱火にして、一時間ほどこげないように混ぜながらあめ色になるまで煮つめる。

というわけで、リンゴの皮むきがはじまったのだけれど、祇園寺先輩の手つきを見るに、もうしわけないけど納得してしまった。不器用だ。皮をむいているだけなのに、実が半分くらいになりそう。それを黒野先輩がおるあおる。

「へいへい、ウサギ王子。知ってます？ 皮をむくのは、実を食べるためなんだぜ？」

「うるさい。包丁投げるぞ」

祇園寺先輩はリンゴから目を離さずにおそろしいことを言う。けらけら笑う黒野先輩。

「っていうかさ、ピーラー（皮むき器）あるじゃん。ピーラー使えよ」

「あれは一度指をスライスしたから二度と使わない」

ぼくは気になっていたことをたずねた。

「どうして、タルトタタンを作りたいんですか？」

先輩の答えは端的だった。「食べたいから」

「自分で？ だれかにあげたいとか、そういうことじゃなくて？」

黒野先輩が笑う。

「きみだって、自分が食べるために焼いているんじゃないのか？」

ぼくはとまどった。そうだけど、そうなんだけど……。

「だったら、食べに行くとか、買ってくるとか、すればいいんじゃない」

リングと格闘しながら、祇園寺先輩は言った。

「試したけどお店の味じゃだめだった。それに、人に見られたらはずかしいし」

ぼくはだまりこんだ。ケーキを食べるのは、はずかしいことなんだろうか。

「ケーキを食べるやつははずかしいやつなのか？」

黒野先輩が代わりにたずねる。「はずかしいやつ」ってすごい表現だ。

「そうじゃない」

手元から視線をあげて、祇園寺先輩が言う。

「でも、私みたいなやつが、ケーキが好きだと、へんでしょ。イメージがこわれる」

その声にはきりきりと痛みのケハイ⁹があつて、だけどぼくには、先輩がなぜそこまで自分のイメージにこだわるのか、さっぱりわからなかった。

「そんなのとつとこわせばいいって、ずっと言ってるんだけどな」

黒野先輩はそう言って、漫画のページをめくった。

リングを煮つめている間に、タルトの生地を作る。鍋を混ぜるのは黒野先輩に任せた。

「こがすなよ、黒野」

「皮むきも満足にできない王子に、言われたくはないな」

薄力粉、塩、砂糖をボウルにふるい入れ、冷たいバターをくわえて切るように混ぜる。そこに、水で溶いた卵黄をすこしずつ入れ、混ぜながらまとめていく。

「あ、こねる感じじゃなくて、切るように……」

祇園寺先輩の手つきを見ながら、ぼくは言う。粉が飛び散っている。

「なかなかむずかしいね」

そう言つて、¹⁰ヒタイの汗^{あせ}を袖^{そで}でぬぐう祇園寺先輩。

「リング、あめ色になつてきたぞ」

「わかりました。火を止めちゃってください」

「I日^{いち}だけどな」

「黒野、揚げ足^{あし}をとるなよ」

あめ色に煮つまつたリングをケーキの型に敷^しきつめる。そのとき、先に汁^{しる}を入れておく。これがカラメルになる。リングの上に三ミリほどにのばしたタルト生地をのせ、フォークでまんべんなく穴をあける。そして百九十度に熱したオーブンで、一時間半、焼く。

「一時間半。長いな」

黒野先輩は言つた。オーブンのふたをしめて、スイッチを入れる。

「でも、なんとなく、やりとげた気分だ」

祇園寺先輩の言葉に、黒野先輩が肩をすくめる。

「まあ、王子にしては及第^{きゅうだい}点^{てん}だろ」

「えらそうに言わないの」

祇園寺先輩は紅茶をいれてくれた。

それから、ケーキが焼けるまで、ぼつぼつとぼくらは話をした。

なんでもないような話。どうでもいい、くだらない話。

だけど、時間とともに、それは大切な話に変わっていく。

「私さ、むかしから、男勝り^{わとこまさ}って言われてたんだ」

祇園寺先輩はそんなことを言った。

「男子相手にけんかもしたし、スポーツも得意だったし。ほら、見た目もこんなだし。名前はウサギなのに、ライオンみたいって、みんなに言われてた」

ぼくはうなずいた。

「ぼくは虎なのにハムスターみたいだって言われます」

「まじでよけいなお世話だな」

うんざりしたようにそう言っつて、黒野先輩が紅茶をすすする。

ぼくは、気になっていたことをたずねた。

「あの……だけど、先輩はどうして、そこまで自分のイメージにこだわるんですか？」

祇園寺先輩はしばらくだまっていた。黒野先輩もなにも言わない。

聞いちゃまずかったかなと、心配になってきたころ、ようやく祇園寺先輩は口を開いた。

「私はさ、うれしかったんだよ。小三で剣道をはじめて。どんどん強くなって。ボーイッシュだとか、かっこいいとか、そういうふうに言われるのが」

紅茶をひと口飲んで、先輩は続けた。

「誇らしくてならなかった。べつに女子らしくなくていいんだって、いや、こういう女子もいるんだって、私が生きていること¹¹で、ショウメイ¹¹できている気がした。羽紗を見ると勇気が出るって、自由でいいんだって思えるって、そんなふうに言ってくれる子もいた」

大切な思い出をなぞるように、そう言う祇園寺先輩。

「だけど……」と、ぼくは言いよんだ。

先輩はだまっけてぼくの言葉を待っている。だけど、なんだろう。言っているのかな。失礼かもしれない。迷っていると、黒野先輩が笑った。

「そうだな。あんまり、今の王子は自由には見えないよな」

そのとおりだった。

今まで作りあげてきたイメージを守ろうとするあまり、ケーキを食べることすら、自分にゆるせずにいる。少なくとも、それを他人に知られたくないと思っている。

「そうだね。こんなのはもう、呪いみたいなもの」

祇園寺先輩はしみじみとうなずいて言う。

それからちいさく笑った。なつかしむように、だけどかなしそうに。

「六年生のころ、友だちになった女の子がいたの。世間一般に言われている意味で、つまりはそれも偏見だけど、女の子らしい女の子だった。フリフリしたかわいい服を着て、絵を描くことと、お菓子作りが好きで。その子が私にタルトタタンの味を教えた」

そう言って、祇園寺先輩は、ぎゅつと眉間にしわをよせる。

「その子の家で、その子を作ってくれたタルトタタンを食べたとき。こんなにおいしいものがあるのかって、そう思った。だから、そう伝えた。そしたら、あの子、ほっとしたように笑って、言ったんだ」

——私さ、羽紗ちゃんのこと、ちょっとこわいつて思っていたけど、気のせいだった。

——なあんだ。やっぱり羽紗ちゃんも女の子なんだ。

「その声はひどく弾はじんでいて。だけど私はぶんぐられたようなショックを受けた」^③

ぼくは黒野先輩の顔をちらりとうかがった。とくに感想はないようだ。もしかすると、すでに知っている話なのかもしれない。祇園寺先輩は続けた。

「それから、私はその子と距離きょりを置いた。ううん、その子だけじゃない。あまいものや、女の子らしいとされるものからも、ますます距離を置くようになった」

私は「らしさ」にとらわれなくなかったんだ——そう、先輩は言った。自由でありたかった。そんな自分のことが好きだった。

「……だから、やっぱり女の子じゃんとか、女の子らしいところもあるんだねとか、言われなくなかった。そういう目で見られるくらいなら、死んだほうがまし」

思いつめた顔で、先輩は言った。

ぼくは、いつになくしずかな、なにか、シンセイなものにふれたような気持ちになった。¹²

心はしんとしていて、だけど、そのほうではふつふつとなにかが燃えている。

らしさ。

男の子らしさ。女の子らしさ。自分らしさ。

ボーイッシュ女子。スウィーツ男子。

虎は虎だから。羽紗は羽紗だから。

轟くん、かわいいし。ケーキ焼く男子とか、アリよりのアリっしょ。今はいろんな趣味があつていいと思う。羽紗を見ると勇気が出る。自由でいていいんだって思える。なあんだ、やっぱり女の子なんだ……。

いろんな言葉が、声が、ぼくの内側で響ひびいては消える。

黒野先輩が言った。

『ボーイッシュな女子らしさ』にとらわれてないか？』

ぼくはおずおずとうなずいた。祇園寺先輩はちいさく笑った。

「そうだね。^④わかつてるんだ。本末転倒^{ほんまつてんどう}だつてことは。私はけつきよく、べつのらしさにとらわれていて、ぜんぜん自由なんかじゃない。でも……」

紅茶の入ったマグを両手で包むように持って、先輩は続ける。

「無理なの。私、女の子みたいって、女の子らしいって、そう言われるの、ほんとにこわい。そんなの、その人の偏見だつても、わかつてる。だけど、だめなんだよ。そう言ってくる人たちは、私のことを『無理して男子ぶってる女の子』っていうふうに見る。そういうありふれた話に落としこもうとする。それが、ほんとうにいやなんだ」

黒野先輩は言った。

「人は、枠組^{わくぐみ}みから外れたやつがいるのがこわいんだよ。だから、自分がわからないものに会おうと、おかしいって言って攻撃^{こうげき}したり、わかりやすいでために押しこんで、わかつた気になったり、する」

くつくと笑う先輩。ぼくはなにも言えなかった。

焼きあがつたタルトタタンをすこし冷まして、ケーキ型^{ケーキがた}から外す。

ぼくたちはそれを切り分け、一切れずつお皿に取った。黒野先輩がいそいそと、あめ色のリングを頬張^{ほおば}って笑う。

「ふぐふぐ。すばらしいね」

祇園寺先輩は、おごそかな表情^Bでタルトタタンを口に運んだ。

ひと口。もうひと口。

しずしずと味わうようにそれをかんで、こくんとのみこむ。

「……おいしい」

先輩はつぶやいた。そうして、泣きそうな声で続けた。

「ばかみたい。こんなおいしいのに。むかつく」

そのまま、祇園寺先輩はうつむいて、なにかを考えこんでいた。ぼくはやっぱり、なんにも言えなかった。だまってタルトタタンを食べた。リンゴとカラメルの香り。

あまずつばい味が口いっぱいに広がって、だけど、今日はただただ、かなしい。

帰り道。

黒野先輩と別れたあと、学校の近くを歩きながら、ぼくは龍一郎（虎之助の兄）のことを考えた。

サッカー部のキャプテン。¹³ブンブ両道の優等生。あの人はいつもぼくに言う。

「人がなんて言おうと関係ない。自分の道を行けよ」

でも、龍一郎はきつと、ぼくが歩いている道のケワしさを知らない。¹⁴

ぼくの歩幅を、体力を、道に落ちていくちいさな石のひとつひとつが、はだしの足をきずつける感触を……それは、おたがい

にそうなのかもしれないけれど、少なくともぼくは、^⑤だれかに「人がなんて言おうと関係ない」なんて、言えない。

人になにかを言われることは、つらい。

自分の道を歩いているだけで、その道に勝手な名前をつけられるのは、歩き方に文句をつけられるのは、どんなに好意的でも笑われるのは、ほんとうにつらい。

祇園寺先輩の思いつめた表情。ウサギ王子の抱えた秘密。

——女の子みたいって、女の子らしいって、そう言われるの、ほんとにこわい。

そうだ。

⑥ ぼくらは自分のままでいたいだけ。そうあるように、ありたいだけ。

それを、関係のないだれかに、勝手なこと、言われたくなかった。

ポケットでスマホがふるえる。ぼくはそれを取りだして、ラインアプリを開いた。

「今日はありがとう。いろいろぐちを言ってしまったてごめん」

祇園寺先輩からのメッセージ。

ぼくはしばらく考えて、ちいさくうなずいた。フリック入力（スマホなどで文字を入力する方法）で、画面に文字をつむぐ。

「先輩。また、タルトタタンを焼きに行ってもいいですか？」

⑦ ぼくは、もつと先輩と話がしたいです」

既読はすぐについた。だけど、返信はなかなか来なかった。

「あれ、虎じゃん。どこ行つてたの？」

その声に顔をあげると、クラスメイトの女子たちがこっちを見ていた。

部活帰りだろうか。数人、かけよってきて、勝手に頭をなでてくる。

「家、こっちのほうじゃないよね？ お出かけ？ いいなあ」

「……秘密」

ぼくはかわいた声で答える。すると、女子のひとりが言った。

「あれ？ なんか、あまいにおいがする。もしかしてケーキ焼いた？」

ぼくは無視する。女子たちがキャッキヤと言ひあう。

「……おいすね」

「……おいすねえ」

「どこで焼いたんだろ。よそのおうち？」

「よそのおうちつて、だれのおうちよ」

「そりゃあ……あれですよ、彼女、とか」

黄色い笑い声。はじけるような笑顔。

無邪気にはしゃいでいる、自覚のない加害者のムレ……。

ぼくは歯を食いしばった。

背中を向けて、その場を立ち去る。一刻も早く。

「あれ、待ってよ虎。なに？ おこっちゃった？」

頭の中がぐらぐらする。胸のおくでなにかが燃えている。ちりちりとのどをこがす、不愉快な熱。口の中に残っているタルトタンの味。断りもなく頭をなでてくる手の感触。どこからかこたまする、今にも泣きそうな祇園寺先輩の声。

——ばかみたい。こんなにおいしいのに。むかつく。

「虎ちゃん、かわいい顔が台なしですよ？」

「ほんとほんと！ ほら、いつもみたいに笑って！」

ぼくはふり返って、さわいでいる女子たちをにらみつける。

それから、大きく息を吸いこみ、精いっぱいの声でさげんだ。

⑧ 今までもずっと押さえこんできた思いが、明確な言葉となって夕日の下に響く。

女子たちの表情が固まるのを見ながら、ぼくは思った。

強くなりたい。ゆれないように。

自分が自分であるために、たたか闘えるように。

(村上雅郁まさゆみ『きみの話を聞かせてくれよ』「タルトタタンの作り方」より)

問1 〓線部1～15のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 〓線部A「凛^{りん}とした」(2ページ)、B「おごそかな」(14ページ)、C「黄色い笑い声」(17ページ)とありますが、この言葉の本文中の意味として最も適切なものを次の中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

A 「凛とした」(2ページ)

- | | |
|---|------------------------|
| ア | 抑揚 ^{よくよう} のない |
| イ | 引きしまった |
| ウ | かほそい |
| エ | かろやかな |
| オ | 優雅 ^{ゆうが} な |

B 「おごそかな」(14ページ)

- | | |
|---|-----------------------------|
| ア | 近寄りがたく重々しい |
| イ | とまどいおびえた |
| ウ | 明るくはればれとした |
| エ | いつも通り落ち着いた |
| オ | おだやかで充実 ^{じゅうじつ} した |

C 「黄色い笑い声」(17ページ)

- | | |
|---|-------------|
| ア | ばかにしたような笑い声 |
| イ | 元気いっぱいの笑い声 |
| ウ | 照れたような笑い声 |
| エ | ほがらかな笑い声 |
| オ | かん高い笑い声 |

問3 — 線部①「黒野先輩がため息をついた」(4ページ)とありますが、それはなぜですか。二十五字以内で答えなさい。

問4 — 線部②「『スイーツ男子』より『お菓子作りが好きな女子』のほうが、ずっと理解されやすい」(5ページ)とありますが、それはなぜですか。三十字以内で答えなさい。

問5 — 線部③「私はぶんなぐられたようなショックを受けた」(13ページ)とありますが、その理由として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分の中では心地よく誇りでもあった男勝りであることが、友だちの女の子にとってはこわい印象を与えていたことに気付かされたから。

イ 友だちの女の子に作ってくれたケーキが美味しいと伝えただけで、今の自分のありように関わらず、やはり女の子だとなり前のように決めつけられてしまったから。

ウ 今まで性別を気にせず好きなように過ごし、自由でいたいと思っていたが、友だちになった女の子と仲良くするには自分を変えないといけないと思ったから。

エ いくらカッコいいキャラクターを演じ、女の子らしさから逃れようとしても、自分は女子であるという事実を変えることができないと分かったから。

オ 自由であるために強くあろうと心掛けてきたが、今回あまいケーキを食べたことで、苦勞して作り上げたそのイメージを壊してしまったことに気が付いたから。

問6 — 線部④「わかってるんだ。本末転倒だってことは」(14ページ)とありますが、祇園寺がどのようなことが「本

末転倒」のですか。八十字以内で答えなさい。

問7 — 線部⑤「だれかに『人がなんて言おうと関係ない』なんて、言えない」(15ページ)とありますが、その理由として最

も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 虎之助はそもそも自分のイメージを他人に決めてほしいと思っており、龍一郎のように周囲を気にせず一人で自分の道を歩めるほどの強さを持っていないから。

イ 龍一郎は優等生であるためなかなか自分の心情を理解してくれないが、虎之助は普通の人にはなじみのない趣味を持って

いるため、その趣味を周囲に認めてもらう必要があるから。

ウ 虎之助はいつも比較されてきた優等生の龍一郎に劣等感を抱いており、兄の言うことをそのまま受け入れて自分の言葉として口にするのは気が進まないから。

エ 龍一郎は優等生で周囲に認められ、他人の言葉に左右されず意志を貫き通せるが、生きづらさを抱えている虎之助は周囲の小さな言葉にも影響を受けてしまうから。

オ 龍一郎は弱い立場にある人の気持ちから鈍いところがあるが、虎之助は人の本音を気にしてしまい、好意的な意見ですら素直に受け取れないほど自分に自信がないから。

問8 — 線部⑥「ぼくらは自分のままでいいだけ」(16ページ)とありますが、虎之助が「ぼくら」と思ったのはなぜですか。四十五字以内で答えなさい。

問9 — 線部⑦「ぼくは、もっと先輩と話がしたいです」(16ページ)とありますが、このときの虎之助の心中の説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 祇園寺先輩のはっきりしない生き方にとまどいを覚え、心に浮かんだ自分の疑問をたずねてみたいと思っている。
イ 自分が今までより強くなることで、見た目とちがって傷つきやすい祇園寺先輩を守ってあげたいと思っている。
ウ 正直に内面を打ち明けてくれた祇園寺先輩のことが頭を離れず、この恋愛感情に似た気持ちを伝えたいと思っている。
エ 自分よりも男らしく生きる祇園寺先輩に憧れ、もっと親しくなつて対等に話せる間柄になろうとしている。
オ 祇園寺先輩の今までの葛藤や本当の気持ちに触れ、自分の中で形をなしてきた思いを先輩に伝えようとしている。

問10 — 線部⑧「今までずっと押さえこんできた思いが、明確な言葉となつて夕日の下に響く」(18ページ)とありますが、この箇所から分かる虎之助の変化はどのようなものですか。本文全体をふまえて、女子たちに対する「今までずっと押さえこんできた思い」がどのようなものか分かるようにして、百字以上、百二十字以内で説明しなさい。

問11 ……線部から読み取れることとして適切なものを、次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 周囲から「ウサギ王子」(3ページ)と呼ばれる祇園寺羽紗をはじめ、轟虎之助、その兄である龍一郎は、いずれも本人の性格と名前に含まれる動物のイメージが一致していないため、人から理解されにくいという悩みを抱えている。

イ 「なんだろうね、この人」(6ページ)、「そういうこと?」(7ページ)のように、会話文以外でも祇園寺や黒野の思っていることがさみこまれ、物語にリズムと面白味を与えている。

ウ 「きみだって、自分が食べるために焼いているんじゃないのか?」(8ページ)、「ケーキを食べるやつははずかしいやつなのか?」(9ページ)のように、黒野は他人の心中を察知して発言し、話を展開する役割を持っている。

エ タルトタタン一つを取っても、「お店の味じゃだめだった」(9ページ)と言うように、自分自身の作り方にこだわる祇園寺は、既製品の味で満足してしまう多くの人々に対して、もどかしさを感じていることが読み取れる。

オ 「ケーキ型から外す」(14ページ)、「それを切り分け、一切れずつお皿に取った」(同ページ)という一連の流れは、人間は誰もが最初は「型」に従っているが、いずれは一人立ちしていかねばならないという虎之助の強い信念を示している。カ 「においますね」(17ページ)、「においますねえ」(同ページ)という女子たちの言葉は、「ケーキのあまいにおいがする」と「何かを隠しているのではないかと感じる」という二つの意味を持っている。

問12 本文を読んだAさんとBさんが次のような話し合いをしました。これを読み、後の問いに答えなさい。

Aさん 「この文章、とても他人事とは思えなかったな。いろんな意味で」

Bさん 「うん、自分のこととして考えてしまった」

Aさん 「私が気になったのは、14ページの黒野先輩のこのセリフ」

「人は、^{わく}枠組みから外れたやつがいるのがこわいんだよ。だから、自分がわからないものに出会うと、おかしいって言って^こ攻撃したり、わかりやすいでたらめに押しこんで、わかった気になったり、する」

Aさん 「クラスにマニアックな(一つの事に異常なまでに熱中する様子)趣味を持っている人っているじゃない？」

Bさん 「いる、いる」

Aさん 「自分たちにはその人の趣味が理解しきれないから、へんなやつだと決めつける」

Bさん 「で、結局、自分たちが正しい側にいると思うんだよね」

Aさん 「そう」

Bさん 「そういえば、私も何かと『受験生らしくしなさい』って言われて腹が立ったな。自分は自分のやり方で勉強しているのに」

Aさん「『受験生らしさ』って型にはまらなくても、自分なりに努力していればそれでいいのにね」

Aさん「この文章には性別をめぐる問題が出てくるけれど、それだけじゃないよね。社会や身の回りを見渡すと、黒野が言う
ことと同じことがあちこちで起こっている」

Bさん「本当にそうだ」

Aさん「たとえば」

★

「というのも同じパターンだよ」

Bさん「さすが、鋭い」

Aさん「受験が終わったら色々な体験にチャレンジしようね」

Bさん「うん、一緒にね」

問い

AさんとBさんの話し合いが成立するように、あなたが考える23ページの
の具体例を、前後の文脈をふまえて、
★に入る形で答えなさい。字数指定はありませんが、解答用紙の枠内に一行で収めること。

国語解答用紙

注意・「」「」○「」「」「」も一字に数えます。

受	験	番	号
国	語		

[illegible]